

補足 重度の胃炎

臨床症状・検査所見

(1) 臨床症状¹⁻⁴⁾

悪心、嘔吐、心窩部痛、食欲不振、心窩部不快感、
嚥下困難など

(2) 検査所見¹⁻⁴⁾

- 腹部CT：広範な胃壁肥厚を認めることがある
- 内視鏡検査：びまん性の紅斑、胃粘膜のびらん、易出血性の粘膜浮腫、びまん性の白色滲出物など潰瘍性病変を伴う場合がある
- 病理組織検査：好中球やリンパ球等の炎症細胞浸潤など
まれに肉芽腫を伴う斑状慢性十二指腸炎または慢性胃炎の所見を認めることもある

サイトメガロウイルスやヘリコバクター・ピロリなどによる感染症、他の炎症性疾患との鑑別も重要です。
内視鏡検査や病理組織検査などは、専門医へ相談の上、実施を検討してください。

参考文献

- 1) Schneider BJ. et al.: *J Clin Oncol*. 39: 4073, 2021
- 2) Hayama N. et al.: *Respirology Case Rep*. 8: e00636, 2020
- 3) Johncilla M. et al.: *Histopathology*. 76: 531, 2020
- 4) Cheung VTF. et al.: *Best Pract Res Clin Gastroenterol*. 48-49: 101703, 2020

ガイドライン等による対処法の補足（対処法はP.35参照）

- 免疫反応に起因する胃炎に対する治療として、プロトンポンプ阻害薬及びH₂受容体拮抗薬の役割は明確にはなっていません。治療には基本的に副腎皮質ホルモン剤が推奨されています^{1,2)}。
- 重度の胃炎は大腸炎と同様の対処法で管理することも可能であることがASCOガイドライン¹⁾に記載されています。（大腸炎・小腸炎・重度の下痢の対処法はP.18参照）
- 副腎皮質ホルモン剤の長期投与が必要な患者に対し、日和見感染予防が必要であるとASCOガイドライン¹⁾に記載されています。

参考文献

- 1) Schneider BJ. et al.: *J Clin Oncol*. 39: 4073, 2021
- 2) Cheung VTF. et al.: *Best Pract Res Clin Gastroenterol*. 48-49: 101703, 2020